

チンコツきり

長谷川時雨

青空文庫

アンポンタンはぼんやりと人の顔を眺める癖があつたので、

「いやだねおやつちゃん、私の顔に出車だしでも通るのかね。」

さすがの藤木さんもテレて、その頃の月並つきなみな警句をいった。

小伝馬町の牢屋の原を廻めぐる四角四面の町々に、アンポンタンの友達の分譜ぶんぷがあり、学んだ学校があり、長唄稽古所があり、親の知合しりあいの家もあつたから、私がポカンと立止つて眺めているなにかしらが多くあつた。もともと牢屋の原の居廻りは、日本橋という主都の中央でありながら、今でいえば新開しんかいの町だけに、神田区上町との間に流れる溝川どぶがわの河岸についた、もとの大牢の裏手の方は淋さびしいパラツとした町で、呆ほうけたような空気だつた。

そのかわりに今いえば日本橋区内の何処どこでもに見られない新職業があつた。古鉄屑屋の前に立つて、暗い土間の隅の釜で、活字が鉛に解かされてゆくのを何時いつまでも眺めたりしていた。古ふるむしろ 蕪かに山と積んだ、汚ない細かい鉄屑かなくずが塵埃ごみと一緒に箕みで釜の中へはかりこまれると、ガラガラした銀色の重い水に解けてゆくのを、いくら見ても厭あきなかつた。それが泥の中へこぼされると、なまこ型にかたまるのも面白かつた。またある板がこいの中を覗のぞくと、そこは地獄のように炎が嚇かつ々と燃えていて、裸の小僧さんが棒のさきへ何か

つけて吹くと、洋燈ランテのホヤになるので息をのんで覗いていた。小さな瓶や、大きな瓶もすぐ出来上るのを見ていたが、暑さと苦しそうなのが、この見物とは反対に、こしらえている小僧さんたちにすまなく思わせた。

表通りには鉄道馬車の線路のある日本の中央の幹線道路でありながら、牢獄ろうごくのあつた時代からはかなり過ぎているのに、人通りがなくて、道巾の広い通りには野道のように草が生えていた。ガラス工場などは板屋根だからよけいに草が茂っていたが、瓦葺かわらぶきの屋根にも青々とした草が黄色い花をつけていた。

藤木氏がチンコツきりをしていたのもその近所だった。はじめ私が発見した時、私は藤木氏なんぞ目にも入れなかった。忙せわしなく煙草の葉を揃える人の手元や、ジャキジャキと煙草の葉を刻きぎんでいる職人の手許てもとを夢中になつて眺めていた。

その日の夕方、いつものように来て、藤木さんは母に呖こぼしていた。

「今日つてきようは弱つたのなんのつて、汗が出たね。だんまりはいいがね、いつまでもいつまでも立つて見ているのだからね。こつちのほうがなにか言わなくちやならない気がして——」

だが真から心配そうにもいった。

「あんな道草けいこしていて、稽古けいこにほんとにゆくのかしら？」

その翌日あたしは、藤木さんのチンコツきりを立って見ていてはいけないいと誠めいましられた。そのついでに母と誰かが話していたのだが、チンコツきりおじさんは、職人としても好よくないのだそうだ。細君の方は目が高くて、煙草の葉を選よるのにたしかで早い、大事な内職人なので、その方を手離うちしたくないために、役にたたない御亭主も雇よっておいてくれる。家でも口やかましい人が外に出ていてくれるのだから、大切に、おがむようにして出でしてやる。店の方でも細君の方に沢山仕事をさせたいので、機嫌をとっておいてくれるので、それでも三日目位にはあきてしまうのだと言いった。

藤木さんはその頃が貧窮のどん底だったが、細君の前だけでは、封建的殿様ぶりを発揮して、怒鳴なみってばかりいた。蜜柑箱みかんにキンタマ火鉢を入れたのが長火鉢かわりの生活くらしでいいて、

「貴様なんぞはボテイフリの嬢かかあにでもなれ。」

というのが口癖で、魚さかな売は自分よりよほど身分違い——さも低級でもあるように賤いやしめのして罵ののしる習慣くせがあつたのだ。貞淑な細君は、そんな事を言われても尤もつとものように押だまもって辛棒強く働はたらいていた。手跡はお家流をよく書き、腰折れの一首もものし、貧乏の中に風流

を解するゆとりもあり、容貌きりようは木魚の顔のおじいさんの娘なりに、似てはいたが醜くはなかった。

娘のおあさは色の黒いところと、人のよい正直者の表標のような光りをもつくせに、ちよいと見は鋭く見える眼つきを父親からもらつて、母親からは祖父ゆずりのお出額でこを与えられた。髪の毛の濃い小ぢんまりした小さな娘だった。

ある日、藤木夫妻と娘とが、私の祖母と母の前に並んで座っていた。あたしもそばへ行つて座つた。丁度父が外おもてから歸つて来て客のまたせてある室へやへゆきがけに通ると、母が縄すがるように言つた。

「おあさが小蒔屋こまきやへ行くことにきまりまして——」

「そうか、金助の家か？」

「さようでございます、清元きよもとが大層氣に入りました——踊りも質たちがいいと仰おつしやつてくださいますので——」

藤木の細君がいった。

小蒔屋——柳橋やなぎばしの芸妓屋の名だった。家へも来るが、両国広小路——電車道路となつたが——の、両国橋にむかつて右側に、「芭蕉ばしやう」という大きな薬種屋があつて、芭蕉

の葉が一葉大きく青く彫刻した看板が棟にあげてある店だった。その藥種屋は「正久の一」という名人の鍼灸はりい医の家で広い店二階に一ぱい患者が詰めかけていた。正久さんは盲目だが上品な老人で、供ともがついて祖母のために療治に来てくれたが、なにしろ患者が多いので祖母の方から通う日も多かった。その待合せは所から芸妓や料理店おちやの人が多く、藤木夫婦の望みと抱妓かかえをほしがっている小蒔屋との交渉が、おもいがけなく私の祖母から出来上ってしまったのだった。

おあさのために御馳走がならべられて、口々に褒ほめた。

「おあさは孝行ものだ、親孝行だ。」

父までが藤木さんに杯口ちよくを与えながらいった。

「おれの家うちでも女の子が多いから、芸妓やをはじめると資金入もとでいらずだが——」

十とおばかりの従姉いとこと、私はだんまりで、二人ともこぼれない涙に瞳めが光っていた。おなじようにムンヅリしていたが、子供心にも思うことは違っていたのかもしれない。私は子供心には言いあらわせない反抗心がグイグイと胸をつきあげていた。その時、父も厭いやだった、褒めそやす母は一層憎かった。ふだんは好きな祖母も、そんな世話をしたかと思うと悲しかった。もとより、芸妓げいしやは美しいものとして、その他の悪いことは知っていようはずも

ないのに、なぜだか、なんとも言えない泣きたい思いを堪えていた。

「親孝行なんて、親孝行なんて——」

なあんだ——ただそう叫びたかった。みんなにむしやぶりつきたい、わけのわからないむしやくしやだった。

「そんな親孝行なんぞしたくもない。」

そう言いたかったのだ、お金で——金のねうちを知らない子供には、物品とおなじように金で子供を売ってしまう親がただ憎かったのだ。それを褒めそやす自分の親たちがなお憎かった、厭だった。子供はもつともつと親をよく思っているのに——私はやりどころのないわびしさを従姉にむけて睨めつけた。従姉は、蝶々髷を光らせて、私の眼を避けてうつむいた。上から釣るされている大洋燈の灯に、蝶々の簪がペカペカした。

この下地ツ子が、二、三年たつてから、盆暮れの宿下りに母親につれられて来て、柳橋へ帰るかえりに寄った。緋の板、縮、緬に鶯色の繻子の昼夜帯を、ぬき衣紋の背中にお太鼓に結んで、反った唐人髷に結つてきたが、帰りしなには、差櫛や珊瑚珠のついた鼈甲の簪を懷紙につつんで帯の間へ大事そうにしまいこみ、棲さきを帯止めにはさ

んで、お尻しりをはしよった。

私はさびしい気持でそれを眺めていた。私の着物を従姉が着るのでよけい親しみが深かったのに、なんとなくその日の従姉は私から離れていつてしまっていた。おあさちゃんの体の方が借りものになって、着物や簪の方が巾はばをきかせていた。

その頃になつて、藤木さんの世帯しよたいは、すこしばかりゆとりが出来た様子になった。根岸の鶯うぐいすだに谷の奥の植木師うえきやの庭つづきの、小態こていな寮の寮番のような事をしながら、相変らずチンコツきりと煙草の葉選りの内職だった。妹娘は常磐津ときわづを仕込んでいたが、勝川のおばさんの方へ多くいつていた。

音無川おとなしがわを——現今いまでは汚れた溝川になつてゐるが——前にした、静かな往来にむかつて、百姓家やの角に、竹で綱んだ片折戸かたおりどをもった、粗末ではあるが閑寂かんじゃくな小屋に、湯川氏のおばあさんが、ポツンと一人住んでいたころなので、私が子供のくせにふさぎの虫を起すと、母は出養生でようじようの意味で、あの心持ちの至極のんびりしたおばあさんの家へ私をやつてくれるのであつた。

前にはざわざわ細流ながれがつぶやいている。向うの藪やぶには赤い椿つばきが咲いて、春の日は流れにボタンと花がおちる。夏ははちすの花が早抹あさあけに深い靄もやの中にさいて、藪の蜘蛛くもの巣にも

花にも朝露がキラキラと光って空がはれていった。藪には土橋をかけて、冠木門の百姓の広庭と、奥深く大きな茅屋根が見えていた。お行の松にむかった方には狩野という絵師の家が、鬱蒼した中に建っていた。

お行の松は、湯川のおばあさんの茅屋からは左斜めの向側にあつて、板小屋の不動堂とその後には寒竹の茂みのある幽邃な一区域になつて、音無川が道路とへだてていた。裏の百姓家も植木師をかねていたので、おばあさんの小屋の台所の方も、雁来紅、天竺葵、鳳仙花、矢車草などが低い垣根越しに見えて、鶏の高く刻をつくるのがきこえた。おばあさんの片折戸のせまい空地も弟切り草が苔のように生えて、水引草、秋海棠、おしろいの花もこぼれて咲いていた。

あたしにはその家がめずらしくつてたまらなかつた。車馬の轟きはめつたに聞こえず、人が尋ねてくるではなし、昼間家の中を青蛙が飛んでいるし、道ばたの小家に簾を釣つて、朝、夜明から戸をあけて蚊帳は釣りっぱなしで寝ていると、まだほの暗い中を人声がして前の川で顔を洗っている。

「おばあさん、あれはなに？」

ときくと、あの顔の大きなおばあさんは、あたしが大人のような返事をして、

「吉原よしわらがえりだろうよ、朝がえりだね、ふられて帰る果報者くわくばうしやつてね。」

「降られてはいやしないよ、お天気だよ。」

とアンポンタンとちやんぽんな問答をする。そうかと思うと、

「入谷いりやへ朝顔を見にゆこうかね、それは美事みことだよ。」

「田圃たんぼへ蓮はすの咲くのを見に行こうよう、おばあさん。ポンポンて音がするつてね？」

「この子はまあ、田圃が好きで、お百姓のお嫁さんにしなければなるまいかねえ。」

あたしは顔も洗わずに、湿った土の上へ一足、片折戸を開けて飛出すと、向うの老百姓の家のお嫁さんが生姜しょうがを堰せきでせつせと洗っていた。名物の谷中やなか生姜は葉が青く生々しやしていて、黒い土がおとされると、真白な根のきわにほの赤い皮が、風呂おゆから出た奇麗な人の血色のように鮮かに目立った。ボンヤリ見ている私は手伝いたくてウズウズしている。小僧さんが天秤棒てんびんぼうが撓たわむほど、籠かごに一ぱいの大きな瓜うりを担いで来て、土橋どばしをギチギチ急いで渡つてた。

町の子のあたしが、笹舟を流すことを知ったのも、麦笛を吹いたのも、夜蒔よまきの瓜の講釈をきいたのも、田圃へどじようを突きに行ったのも、根岸の里住居のたまものだった。おばあさんは切れの巾着きんちやくの中味を勘定して、あたしのおやつや好きな塩しお鮭じゃけの一切

れを買いにいった。まだ上野山下の青石横町にいる時分に、あたしは雨^{あま}上^{あが}りに三枚橋下へ小魚を掬^{すく}いにいったり、山内へ椎^{しい}の実を拾いにいって、夜になるとおばあさんの不思議な話をききながら煎^いつてもらって、椎の実の味を知った。秋のはじめになると、

「蓮^{はす}の実はいらないか、蓮の実はいらないか。」

と短く折った蓮の薤^{しべ}を抱えて、売ってくれる子とも馴^{なじ}染^みになって、蓮の実の味も知った。そんな事は日本橋油町^{あた}辺りの子供の誰一人知ってはいなかった。

田圃道を歩きながら、おばあさんは錦^{にしき}絵^えのような話をはじめめる。

「根岸にはお大名の別^{しもやしき}荘^{しやう}が沢山あるけれど、加賀様のお姫さまがたは揃^{そろ}つてお美しいか。つた。お前さん、桜^{はな}の咲くころに、お三方^{さんかた}もお四方^{よかた}も揃^{そろ}つてお出^{いで}になると、まるで田舎源氏の挿絵のようさね。」

「おばあさん、お姫様はピラピラをさげてる？」

「お桂^{かけ}は召^めていないが、お振袖で、曙^{あけぼの}染^{ぞめ}で、それはそれは奇麗ですよ、お前さんに見せたいね。ほんと！桜の花よりものいう花がきれいさ。」

あたしにはまたちよいとこの会^{はな}話^{なし}が分らなくなる。牛乳^{ちち}を吞^のましてくれる家^{うち}の門^{かど}に来た。

「ここらはもう三河島^{みかわしま}田圃。」

とおばあさんがいったから、三河島の方へ寄っていたのであろう。一ひとかまえ構かまの百姓家は牧

場になつていた。牛の牧場なんてそれまで見た事もない私だった。優しい眼をした黄と白の斑まだらうし牛が寝そべつていて、可愛い仔牛こうしがいたが、生きた牛の添そばにいった事はないし、臆病な私は怖こわかった。若いキリリとした女房おかみさんが、堀井戸に釣るしてあつた鐘かねからコツプへ牛乳を酌くんでくれた。濃い、甘い、冷たい牛乳だった。

「お砂糖がはいっているよ。」

と私が悦よろこんでいうと、おかみさんとお亭主が笑つていった。

「お砂糖はいれてないけれど、絞うりたての甘いのをあげたのさ。」

こんな風におばあさんはよく私を連れて他家へいった。私が本を読みたがると、何処どこから聞きだしてきてくれて、私を貸本屋へつれてゆくといった。

毎日二時過ぎると小さなお釜かまでお湯を湧わかして、盥たらへ行水のお湯をとつてくれた。私は裏からも表からも見透みすかしの場処でのんきに盥の中へ座る。雨蛙にもお湯をぶつかける。大きな山蟻ありが逃出すのを面白がる。或時あるは蟄ひきがえると睨めっこしながら盥の中にかしこまっている。涼しい風にくしやみをするとおばあさんが声をかける。

「さあ、もういいよ。」

汗知らずをまだらにはたきつけて貸本屋さんへ出かける――

貸本屋も御隠居処なのである。寒竹の垣根つづきの細道を、寒竹の竹の子を抜きながらゆくとは何処でかやぶうぐいす藪鶯が鳴いている。カラカラと、迂すべりのいい門の戸をあけると、踏ふみ石しだけ残して、いろとりどりの松葉牡丹ぼたんが一面。軒下に下っている鈴をならすと、切髪きれいの綺麗な女隠居が出てきて、両手を揃えて丁寧におじぎをした。

『妙々車』『浅間嶽』などが私の膝の前に高く積み重ねられた。私は幾度か見たものもあればまだ一度も開いたことのないものもあった。小さな私が一心を魅とられてしまっている時にこの二人の閑人――老婆がどんな話をしていたのか、思出すことも出来ない。

「これだけ拝借して、一日三銭でよいと仰おつしやったよ。」

湯川のおばあさんは帰り道でそういった。私の本の見方が、大人より大切に、キチンと座って読んでいるのに、先方の老女が感心して安くしてくれたのだと、――それにしても、あんまり少額すけないお札に驚いた。

「宅にあるのを、みんな読ましておあげなさい。お好すきなものを見せないなんて、わからない親御おやじさんだ。」

そうも言ったのだそう。けれどその家にはくさ草紙よりほかなかった。

夕暮が来て、草双紙にもあきると、おばあさんを誘ってまた田圃に出た。螢^{ほたる}がチラホラ飛んでいる。小さな棺を担がした人がスタスタ通つてゆく。前の堰^{せき}では農具を洗っている。鍬^{くわ}が暗^{やみ}にも光る——その側^{そば}で、大きな瓜を二ツに裂いている。

「この種をも一度蒔^まくので、熟^うれすぎたから塩押しにするのだ。」

と教えてくれる。三河島田圃の方の空が明るくて、賑やかな物音のする心地^{こころち}がすると、あつちが吉原だと言つた。昼間よりも、田圃みちを人が通っている。

谷中芋^{いもぎ}坂の名物羽二重団子^{はぶたえだんご}がアンポンタンのお茶受けに好きだった。その団子屋の近くは藤木さんの住居になった寮だ。腰障子の土間の広い、荒^{きぐみ}つぽい材組で、柱なんでも太かつたが、簡素な造りで、藤木さんは手拭ゆかたを着て、目白^{めしろ}をおとりにして木立に小鳥籠^{いくつ}が幾個かかけてあつた。瑠璃^{るり}の朝顔が大輪に咲くのを自慢した。

朝顔を見にいった朝は、なんでも朝飯を食べていってくれと夫婦^{ふたり}していった。それは私に代表させた私一家へ対しての、夫婦の感謝だったのかも知れない。子供^{こども}だけれど潔癖^{しそ}だからと、白い御飯を光るように炊^たいてだした。お豆腐の上に、まっ青な、香^{かおり}の高い紫蘇^{しそ}の葉がぎざんで乗せてあるのが私をよろこばせた。

「妙なものが好きだ。」

夫婦は私のお膳ぜんの前にいて、煽あおいでくれなごらいつた。

「お豆腐のきらいなのは知っているから、どうしたら好いかと心配したのだった。青いものが好きだから気に入るかと思つて——」

木の枝にかけわたした竹棹ざおに蔓つるがまきついて、唐茄子とうなすが二ツなつていた。

「朝顔につるべとられて——とかなんとかいうが、おやっちゃん、宅うちじゃあね、あれごらん、唐茄子に乾棹ほしざおとられてだよ。」

藤木さんは秀逸らしくいつて、

「だけど、うんと大きくして、油町へもつてつたつて、こいつあ一個ひとつでも、とてもあまるつて、あの人数でもうならせるほど大きくするんだ。」

「桃の中から桃太郎が出るから、唐茄子から何が出るか、あたくしやあ楽しみだよ。」
と湯川おばあさんがいつた。

「違ちがえねえ、飴あめの中からお多福さんが出たよだ——さあさあ、これなる唐茄子から何が出ますか代価だいはいは見てのおもどり——ハッ来た、とくりやあたいたものだ、文福茶釜じやあるめえし、鍋に入れたからつて踊りだしやあしまい。」

藤木さんがそんな戯談じょうだんをいつた時に、唐茄子の中にははいつていたものがあつたの

だった。あんまり大きくなるが様子が変だからと、ほうちよう庖丁を入れたら小蛇が断きれて出た。

幾年か経たった。千葉の方にいた私の母の妹が、藤木の家が気楽だからと荷物を置いて宿にしていた。土佐の藩士で造幣局に出て、失職して千葉の監獄の監守になり、後に台湾でこつとう骨董商と金貸をした（虎と蛇の葉をもつて来た）人の細君だった。——その時分ようや漸く奉還金の残りが公債証書で渡されるとかいつて悦びあつていた間柄だった——気むずかしい毒舌家の藤木さんが、一番気のあつた女ひとだった。極ごくく早いお茶の水の卒業生だった彼女が学校を出て、大丸横町の岡田学校というのへ月俸金四円也で奉職したのは、私などの知らないころだったが、わからずやの私の母は、妹が毎日袴はかまをはいて大門通りを通り、近所の小学校へつとめに来られては肩味がせまいという理由のもとに抗議をもうしこんだ。そのためにあんなおじさんのところへお嫁入りをさせられたのだと、明治十何年か時代の摩登女性さかもとは、平凡に——あんまり平凡になりすぎた運命をよく嘆いていた。

ある日坂本さかもとに昼火事があつて、藤木さんは義妹いもうとの一人子を肩にして見物していたが、火勢が盛んなので義妹にも見せたくなくなつて呼びにかえた。自分の見世物のように、勢よく燃えあがつている火事を眺めさせていると、根岸の方に飛火があると騒ぎだした。と

つて返して見ると見当がわるい、自分たちの方角だ。おやおやと駈^かけつけて見ると、住居の茅^{かや}屋根が燃て、近所の人たちが消ていてくれた。

飛火は消えた。どうやら半焼——それも戸棚の中だけですんだというので、狂気のように家の中にはいつて見ると、戸棚の中味だけがすっかり焼けつくして——やつと、どうにかなりかけた藤木の品^{もの}ばかりでなく、田舎からはこんで来た義妹の家財は一物も満足なのはなく、一緒にして鞆^{かばん}へ入れておいてもらった両家の家^{かろくほう}禄奉還金^{かんきん}の書類も灰になつてしまつていた。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

チンコツきり

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>